知床財団がお届けする 知床の自然情報誌SEEDS（シーズ）　公益財団法人 知床財団　発行日 2014年5月2日

SEEDS

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.222
2014 / 春号

自然特集
知床のウニ漁

活動レポート
私たちと国立公園～原点から振り返る～

>>知床・人・インタビュー 第19回
桑島　繁行さん

>>スタッフの本棚 第12回
沈黙の春

>>知床財団 購買部
知床財団オリジナルTシャツ“Ver.3”登場！

>>知床財団 この一品 第1回
自然復元係的スコップ

■写真　国後島を背にウニ漁を行う羅臼の漁師

文 - 秋葉圭太　公園事業係主任

知床五湖フィールドハウスの店長であり、国立公園のよりよい利用のあり方をめざす若きリーダー。硬派な外見とお茶目な内面のギャップが売り。

私たちと国立公園
～原点から振り返る～

2014年6月、知床国立公園は指定50周年の節目を迎えます。悠久の自然の時の流れからすれば、一瞬の出来事かもしれませんが、この間、世界遺産に登録された知床も日本の社会も大きく変貌したことは事実です。知床財団はそのうち26年間を共に歩んできました。

さて、では私たち知床財団にとっての国立公園とはなんでしょうか。一言でいえば、私たちの活動の拠り所といえるでしょう。それは、単に場所や制度という意味だけではなく、歴史や理念などの精神的なものも含みます。―価値ある自然を〝公園〟として保全し、広く感動と体験の場として公開する―この理想に対する夢と共感が知床財団にもあるのです。

今回、この50周年を機に、知床財団誕生の地でもあり、我々の原点ともいえるホロベツ地区から、知床国立公園を改めて見つめ直してみたいと思います。

これまでの歩み

西暦	
1964	国立公園に指定される
1974	斜里町、羅臼町による「知床憲章」が制定される
1977	斜里町で国立公園内の民有地を買い上げる「しれとこ100平方メートル運動」がスタート
1978	知床博物館が開館する
1980	知床横断道路（国道334号）が開通する
1983	羅臼ビジターセンターが開設される
	知床国立公園幌別地区基本構想が策定される
1986	知床国立公園幌別地区園地整備計画が策定される
1988	知床自然センターが開設される
1991	斜里町ウトロに知床国立公園ウトロ管理官事務所が開設される
1999	知床五湖～カムイワッカ間のマイカー規制が始まる
2005	世界自然遺産に登録される

知床自然センター

地域が育てた国立公園

国立公園は、「国が指定し、管理する」と法律にはありますが、実際は地域がそれを受け入れ、主体的に関わらなければ、「生きた」国立公園とはなりません。知床では、地域が国立公園を自らのアイデンティティとして取り込み、育て、さらには公園づくりをリードしてきた歴史があります。その姿勢と理念は、斜里町が作った知床国立公園幌別地区基本構想（1983）、知床国立公園幌別地区園地整備計画（1986）の2つの計画、通称「自然トピア〝しれとこ〟計画」によく表れています。当時、国の公園管理官（レンジャー）も、ビジターセンターも斜里町にはありませんでした。そんな状況の中、この計画は策定されました。

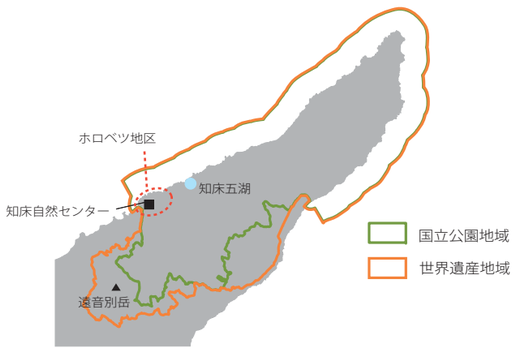
自然トピア〝しれとこ〟計画は、よくある無機質なお堅い行政文章とは何か違います。一言でいえば「熱い」のです。寝食を忘れて議論し、知恵を集めて理想の国立公園を知床に！そんなチャレンジの姿勢と情熱が行間にあふれています。そしてその内容には、知床の園地内を地域の力で整備し、先駆的なマイカー規制を導入することで知床の俗化を防ぎ、自然を守るべく様々なアイディアが盛り込まれました。この計画により私たちの活動拠点である知床自然センターが斜里町ウトロのホロベツ地区に整備され、同時に「自然トピアしれとこ管理財団（現・知床財団）」が発足しました。

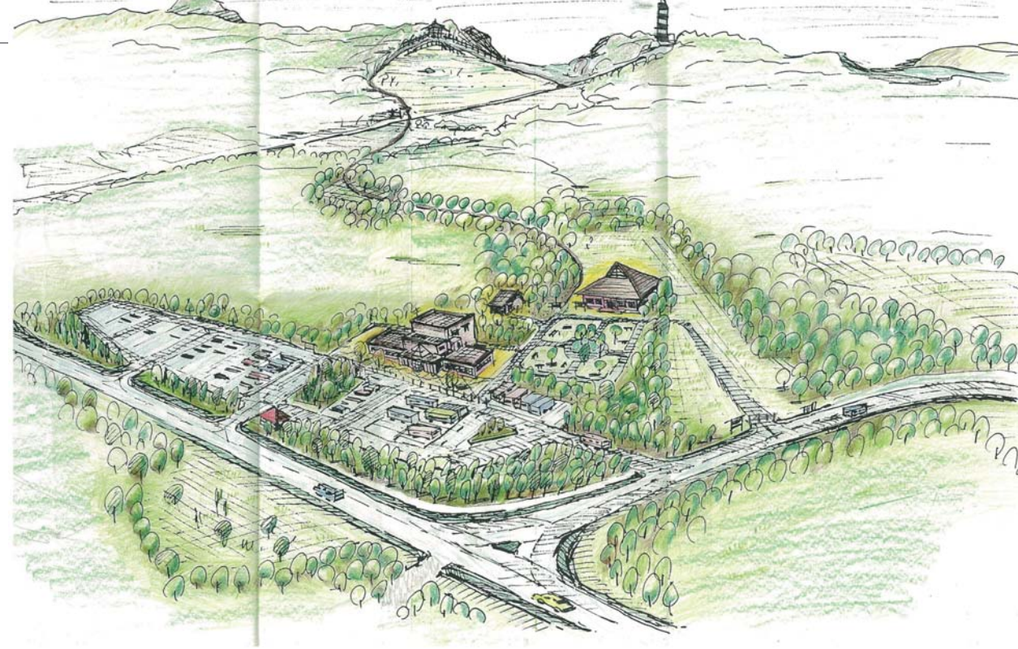
構想の序文にはこうあります。「この計画は…はるか21世紀まで視線を伸ばし、そのとき、知床のあるべき姿をイメージして策定しようとするものである」まさに、この計画は、現在の私たちに向けて投げられたボールなのです。

トピア計画から現在へ

ボールを受け取った後、知床をとりまく情勢は大きく変化しました。特に2005年の世界自然遺産登録は、知床五湖の利用方法の改革など、知床国立公園へ大きな変革をもたらすきっかけになりました。一方、遺産登録当時まで年々増え続けていた来訪者数はこの10年間でピークアウトし、今では減少傾向にあります。

国立公園指定から50年経った今、時代の変化に即した次のトピア計画が必要です。新しい計画に必要な要素はなんでしょうか。それは、今までのように利用を規制するのではなく、新たな体験や楽しみ方を提案するアイディアだと私は思います。そしてそれが、公園を守る新たな力の源となるはずです。





トピア計画当時
のホロベツ予想図
（絵：大瀬昇）

公園の入口
ホロベツ地区を活かして

知床国立公園の入口にあたるホロベツ地区は、知床の多彩な魅力が凝縮された場所です。森と草原が隣接し、多くの野鳥や動物を身近に観察できます。海と断崖、知床連山を一望できる場所は他にはなかなかありません。さらには、開拓時代から残された住居跡などもあり、現在も続くくしれとこ100平方メートル運動（※）のストーリーを伝えるのに最も適した場所です。しかし、今のホロベツ地区にはフレペの滝までの片道1kmの遊歩道しかなく、滞在時間も半日に満たないのが現状です。公園の入口であり、海と山両側にアクセスできる立地を活かし、その魅力をあまさず体験できるフィールドをつくることが、これからのホロベツ地区、そして知床には必要です。

そのために大がかりな整備や施設は必要ありません。たくさんの種類の「歩く楽しみ」を提供できればよいのです。歩くことはもっとも大切な公園利用のあり方です。

し、魅力あるトレイル（遊歩道）は、世界中から人々を集めるパワーがあります。例えば、ホロベツ地区を起点に、3キロ、5キロ、10キロ、20キロの多彩なトレイルのネットワークを作り、知床五湖や知床峠、カムイワッカの滝へこのトレイルを使ってアクセスできるようになれば、ホロベツ地区を中心に「歩いて体感する知床」という新たな魅力が公園内に生まれるでしょう。

トピア計画には、ホロベツ地区をマイカー規制の拠点とし、自然センターをシャトルバスのターミナルとする計画がありました。今後、トレイルと組み合わせた公共交通機関のサービスも充実すれば、歩いて目的地に行き、帰りはバスで帰ってくるライドアンドウォークという新たな利用の仕組みができ、国立公園の入口としてのホロベツ地区の機能がさらに充実したものとなるでしょう。

写真
（右）知床自然センターでの観光客向けレクチャー
（中）フレペの滝遊歩道
（左）上空から望むホロベツ地区
右下の建物は知床自然センター

国立公園を見つめ直す

「原生的な自然を永久に保全すること」「自然と人間の真のふれあいの場を創造すること」

トピア計画で掲げられた理念は、国立公園の思想そのものです。そしてそれは、単なるお題目ではありませんでした。事実、トピア計画をはじめ、先人達は思い描いた夢や構想を次々と現実のものとしました。そのひとつの到達点が世界遺産登録であったように思います。それは、他所から授けられたものではなく、突然降ってわいたものでもありません。地道な積み重ねの結果としての里程標と考えればしっくりきます。

次の50年、私たちが受け継ぐのはこの理念とチャレンジする姿勢です。先人の歩みからは「常にチャレンジし続けよ」というメッセージが聞こえます。現場から生まれるアイディアや取り組みには、日本の国立公園のあり方そのものをダイナミックに変化させる力がある。公園指定からの半世紀は、それを証明する歴史でもあったように思います。

国立公園は日本の自然を守り、楽しむための屋台骨です。知床国立公園は、その可能性を示し続ける実験場なのです。もともと知床に縁もなく、ナチュラリストでもない私が知床（財団）に引き寄せられた理由もそこにあるようです。私の一歩も「原点」であるホロベツ地区から進めたいと思います。利用のバリエーションや選択肢を増やし、先駆的な楽しみの仕組みを創造することが、これからの私の新たなチャレンジです。

※しれとこ 100 平方メートル運動：かつて開拓された知床の土地を森の姿へ戻そうと斜里町がはじめたナショナルトラスト運動。全国から集まった寄付金により土地の買い取りはすべて終了し、現在は森づくり作業を日々進めている。